

令和2・3・4年度 鹿屋市研究協力校「心の教育」 鹿屋市立西原小学校

- 研究主題 -

自己を見つめ、他者のよさに気付き、互いに認め励まし高め合う子どもの育成
～自己肯定感を高める取組を通して～

I 主題設定の理由

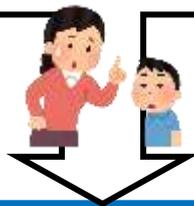
【子どもの実態から】

- 自分に自信をもてない
- 自分のよさがわからない
- 気持ちを素直に表現できない
- 他者より優位に立ちたい
- 見て欲しい、構って欲しい
- ものを壊す
- 授業に集中できない
- 指示を守らない
- 言葉遣いが悪い

【子どもの実態から】

- 活動的である
- 進んで他者に関わる
- 友達と仲よく過ごす
- 友達を大切にしている
- 他者のよさを認めている
- 他者の意見を受け入れる
- 明るく元気である
- 負けず嫌いである
- 責任を果たそうとする

子どもの課題を
解決していく



「心の教育」
の充実



子どものよさを
伸ばしていく

【教師の願いから】

- ・自分も周りも認め合える子どもになってほしい
- ・相手意識をもって、素直に他のことを認めることができるようになってほしい
- ・自己肯定感をもち、前向きに努力できる子どもになってほしい
- ・友達のよさを認め合い、高め合える子どもになってほしい

【時代の現状から】

平成30年度(2018年)版の内閣府調査で、「自分に満足」という人の比率は、欧米諸国で80%台なのに対し、日本では40%台、「自分には長所がある」という人の比率は、欧米諸国では90%前後なのに対し、日本では60%程度となっている。このことから日本の自己肯定感は、低い傾向にある。

II 研究の仮説・視点

本校の子どもの実態や教師の願い等から子どもに必要な力を、**自己肯定感・自己理解・他者理解・認め合う力**とした。子ども自身が「自己を見つめる」ことで「自己理解」を深めていく。また、自分と関わる他者を自分と同様に見つめることで「他者のよさに気付(き)く」ことができ、「他者理解」を深めていく。そうすることで、自分と他者が関わり、互いに認め励まし高め合(う)い、「認め合う力」が育つ。このように、子どもが「自己理解」「他者理解」を深め、他者と互いに「認め合う力」を高めていくことにより、子ども自身の「自己肯定感」が高まっていくのではないかと考えた。



子どもの実態・教師の願いから出された

4つのキーワード

自己肯定感 自己理解 他者理解 認め合う力

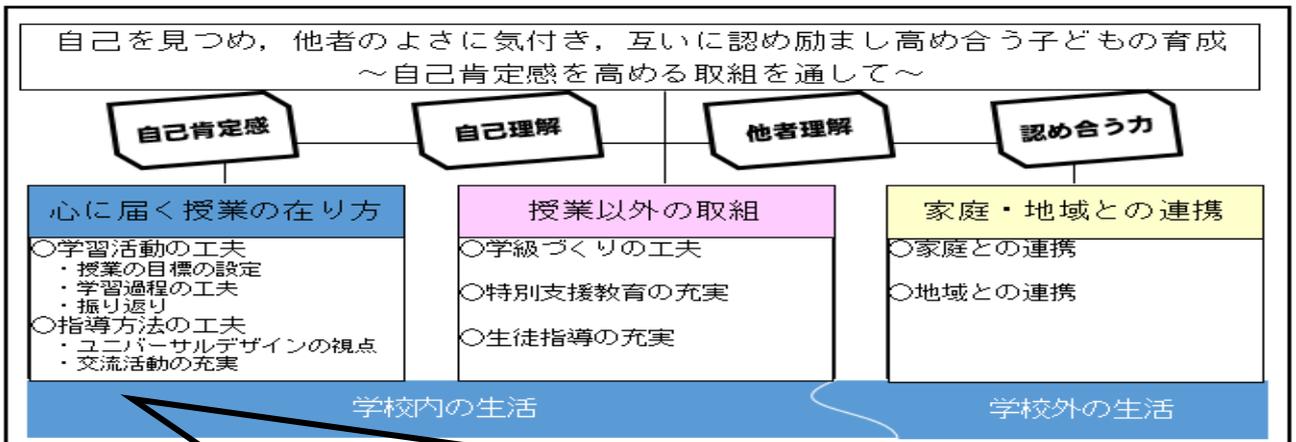
Ⅲ 本研究が目指す子どもの姿

本研究では、研究テーマ及び「4つのキーワード」に基づき、目指す子ども像と子どもの発達段階における目指す子どもの姿を以下のように設定した。

研究テーマ	自己を見つめ	他者のよさに気づき	互いに認め励まし合い高め合う
	「自己理解」を深める	「他者理解」を深める	「認め合う力」を高める
「自己肯定感」を高める			
目指す子ども像	善悪の判断，周りへの思いやり等がしっかりと身に付いた子ども		
低学年	○「内なる自己」を素直に「外に表れている自己」に表現できる。	○自分と他者の違いに気づき，他者の姿を受け入れることができる。	○他者に気づき，他者に関わろうとすることができる。
中学年	○自分の姿を客観的に見て，心の中の対話することができる。	○他者を見つめ，他者の姿を受け入れ，理解することができる。	○他者を見つめ，自分のできることを考え，他者への行動に移すことができる。
高学年	○自分の思いに沿ったよりよい姿を「外に表れている自己」で表現できる。	○他者を見つめ，他者の自分との違いを自分に生かすことができる。	○他者と関わり合い，他者の高まりや自分の高まりを実感することができる。

Ⅳ 研究の構想

子どもの実態・教師の願い等から導かれた研究テーマに基づき，本校教師が必要であると考えた研究内容を「心に届く授業の在り方」「授業以外の取組」「家庭・地域との連携」の3つに分類した。



ア①授業の目標の設定

- ・授業の目標に単元・題材の「学びに向かう力・人間性等」を意識する。
- ・本研究に関する子どもの実態や教師の振り返りを把握する。

過程	学習過程	学習活動
導入	つかむ	1 学習課題をつかむ。
	見通す	2 学習問題を立てる。
		3 予想を立てる。
展開	調べ	4 自分で調べる。
		5 他者と交流する。
終末	まとめる	6 学習問題をまとめる。
	生かす	7 見届ける。
		8 振り返る。

ア②学習過程の工夫

- ・本時の学習の流れをつかむ。
- ・方法と結果に見通しをもつ。

イ②交流活動の充実

- ・他者と関わり，互いに高め合う。
- ・自分の考えを再構築する。

ア③振り返り

- ・内容・方法，自他を振り返る。
- ・自他の学びに実感をもつ。

イ③ユニバーサルデザインの視点

- ・子どもが学習内容や学び方に見通しをもつ。
- ・子どもが主体的に学ぶ。

3つの分類のうち「心に届く授業の在り方」及び「授業以外の取組」は，子どもが学校で生活している場面とした。また，「家庭・地域との連携」は，子どもが学校外で生活している場面とした。子どもが過ごす学校内での生活全般にわたる活動や指導の手立てを工夫したり，子どもが過ごす学校外の生活においても学校からできる手立てを工夫したりすることで，子どもの育成を図ることとした。特に，子どもにとって必要と考える，先に示した4つのキーワードに設定された子どもの力が高まるようにした。

「心に届く授業の在り方」における，一単位時間の授業の流れを左図のようにまとめた。

一単位時間の授業の流れ

V 研究の実際

1 心に届く授業の在り方

本研究の研究領域である「心の教育」をテーマに新学習指導要領に沿い全ての教科等における「ア 学習活動の工夫」を行い、それらを育むための「イ 指導方法の工夫」を行った。

ア①授業の目標の設定

毎時間の授業の目標に「学びに向かう力・人間性等」の目標を設定

- ・ 指導内容に沿った重点とすべき目標＋単元・題材の「学びに向かう力・人間性等」の目標

□ 目標

- (1) 【知識・技能】
 ／ 【思考力・判断力・表現力等】
 (2)
 【学びに向かう力・人間性等】

イ①ユニバーサルデザインの視点

学習内容や学習方法に見直しをもつための工夫

- ・ 「学習のきまり」で授業のあるべき姿を意識
- ・ 板書の工夫（板書の構造化）
- ・ ノートづくりの工夫（学びの再現）



ア②学習過程の工夫

毎時間の授業の流れ「問題解決的な学習」

- ・ 「授業の流れ」「方法と結果」の見直し



【学習計画表（国語科）】



【学習計画表（社会科）】

- ・ 他者との「交流活動の充実」【イ②】
- ・ 「振り返り」による積み上げ【ア③】

イ②交流活動の充実

子どもが他者と関わる機会を増やし、互いに高め合う交流活動の充実

- ・ 互いに高め合うための「対話活動の工夫」



- ・ 他者との交流で自分考えを再構築



※ 一人一人に合った学びの場を設定

ア③振り返り

毎時間の授業に「振り返り」の時間を設定

- ・ 各教科等の特性に応じた視点
- ・ 「わかった」「できた」の視点
 → 単元・題材の学びの積み上げ
- ・ 「なるほど」「もっと」の視点
 → 他者のよさへの気づき・高め合い

学習したことを振り返ろう！	
わかった	○今日の学習で「わかったこと」は、何ですか？
できた	○今日の学習で「できるようになったこと」は、何ですか？
なるほど	○友達の見方や考えで「なるほど」と思ったことは、何ですか？ ○友達の考えで自分の考えが変わったことも書きましょう。
もっと	○もっと知りたいこと、できるようにになりたいことは、何ですか？



【ノート】



【タブレット】

- ・ ノートの「振り返りカード」活用
 - ・ タブレット「振り返り用スライド」活用
- ※ 一人一人が振り返りで学びを実感

2 授業以外の取組

子どもの自己肯定感を高めるため、校内の環境を整え、家庭との連携を図るための取組を行った。



各教室に、友達の良いところや頑張っているところを書いたキラリカードを掲示する「ラブリーコーナー」を設置している。

学級ラブリーコーナー



各学年の廊下に、その学年の頑張っていることや協力しているところなどの写真を紹介している。

パネル〇年生のキラリ



子どもに使ってほしい言葉を教室や廊下に掲示している。

あったかことばの教室や階段への掲示



各学年の廊下には、学年のキラリコーナーを設置し、学年に関わる友達のキラリと輝いていることを紹介している。

学年キラリコーナー



道徳ノートの振り返りについては、学期末に家庭に持ち帰らせ、保護者からコメントを貰うようにした。

道徳ノート



職員室前にも「キラリコーナー」を設置し、職員や他学年の子どもにキラリカードを書き、毎週水曜日に放送で紹介している。

学校キラリコーナー



学校での取組を保護者に知っていただき、家庭でも自己肯定感を高めて貰えるように「キラリ通信」を発行している。

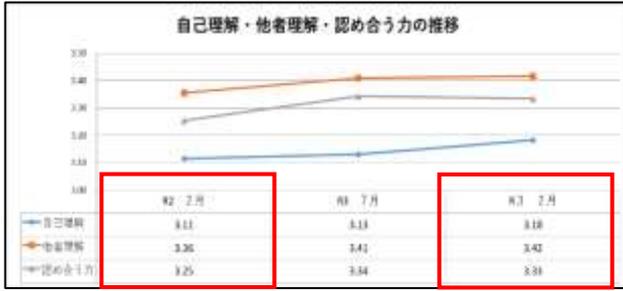
キラリ通信



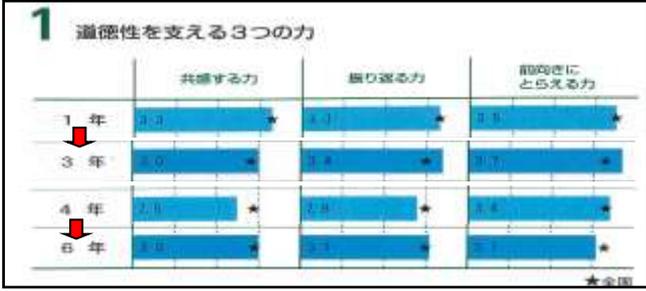
週報に各クラス「今週のきらり」や「きらり発見」を載せている。

学級通信キラリコーナー

VI 研究の成果と課題 (成果○ 課題●)



【表1 「学校生活アンケート」による結果】



【表2 「BEING (心理検査)」による結果】

- 本校作成「学校生活アンケート」の結果(表1)より、自己理解(+0.07)、他者理解(+0.06)、認め合う力(+0.08)の向上が見られ、交流活動や振り返り等の成果が確認できた(R2-R4年比)。
- 現3年生と現6年生を、一昨年度の「BEING (心理検査)」の結果と比較すると(表2)、現3年生は3項目で全国比を上回り、現6年生でも2項目で全国比と同等に向上している。また、教科での振り返りや、キラリ通信・週報・道徳ノートによる家庭との連携の積み重ねの成果が確認できた。
- 自信をもった発言や友達の言動を認め励まし合う子どもたちの言動が、授業内や普段の何気ない言動にも見られることが多くなり、研究に合わせた教師の意図的な関わり等の成果が確認できた。
- 「学校楽しいとの結果」から、実施時期や学年によって差はあるが、学校全体として自己肯定感(+0.77)の向上が見られた。(R1-R3年比)
- 「学校生活アンケート」の結果には学年差があるため、これまでの活動の分析を行い、学年の実態に合わせた活動を継続していく必要がある。
- 自己肯定感の向上率には課題があるため、意図的な活動等を更に検討・実践するとともに、家庭・地域との連携を深め、効果的に自他の良さを認め合う環境を構築していく必要がある。
- 単元間・学年間の関連や、教科や学年の枠を超えた活動にも視野を広げ、「カリキュラム・マネジメント」の視点から、自己肯定感を高めていく活動を検討・設定していく必要がある。